

足利将軍家の荘園制的基盤 ——「御料所」の再検討——

山田 徹

室町幕府将軍権力の直轄領として注目されてきた御料所については、義政期以降が主な検討対象とされつつ、奉公衆に預け置かれる点が強調され、また幕府政所の直接管理にあたるものを中心にイメージが描かれてきた。そしてそのような偏りの結果、御料所は財政的収入の面も含むさまざまな点で、積極的な評価を与えるのは難しいとされてきた。

しかし、室町期に「御料所」と呼ばれて優先的に諸役を免除されていたのは必ずしもそうした所領のみではなく、そこには足利将軍家の近親に付与されていた所領も含まれていた。また、奉公衆のみならず、守護やその関係者に預けられるケースもあり、室町幕府の最盛期である義満～義教期を考える場合は、政所関係のもののみを取り出して評価を下してしまうことには、大きな問題があったのである。

そういったものも視野に入れつつ、義満～義教期における御料所の諸事例を改めてみなおしていくと、大規模・高収入な所領が従来思われてきたよりも多く含まれていることがわかり、その収入も軽視できない規模に及ぶと推算された。地域における御料所の存在感についても、改めて評価しなおす必要がある。また、このような荘園所領からの収入の規模の大きさは、御料所が遠隔地にも所在していた点とともに、荘園領主のなかにおける足利将軍家の卓越性を示すものといえる。このほか、いったん一門に付された御料所について室町殿が付け替えや再配分をおこないうることも指摘したが、こういった諸点を考慮すると、やはり御料所そのものや足利将軍家の荘園領主的側面について、旧説ほどの低い評価を与え、軽視してしまうべきではないと考えざるをえない。